三川鉱で起きた落盤の犠牲になつた三池労組の電気員・吉田哲郎さんの遺体は、翌日の朝坑口で待ち続ける仲間たちのもとへ帰つてきた。も早や言葉もなく……。

団体交渉で会社責任追及

遺族の救済に万全を

落盤災害で納得ゆく回答を

六月十一日、三井石炭は三川鉱で大規模な落盤事故をひき起こしまたも、吉田哲郎さん（43歳。電気員。三池労組員）をはじめ六人もの労働者の命を奪った。

すでに災害原因が会社の保安サボにあることは、新聞やテレビなどマスコミでも明らかにされ、一般から非難の矢が集中した。

三池労組は、十五日さっそく会社（現地三池鉱業所）との間に団体交渉をもち、①今次災害の会社責任を明確にせよ。②遺族に対し万全の措置を取れ。③保安点検、保安日対策の強化と、今後の保安確立のため万全を期せ――の三項を申し入れ、交渉を行った。

もちろん③項の問題については努力を期待するにしても、①と②については、会社は即答を避けている。でも、本紙二面の記事にあるように、こんどの災害は会社幹部もハッキリと、保安対策の不十分さがひき起こした事実を認めていることでもあり、組合として十分納得のいく答えが出されてしかるべきだろう。

三池労組は、ひき続き会社の責任ある態度を期して、交渉を重ねていく。

責任は消えない

会社現場取り明けを中止

六月十八日にいたり、会社から三池労組へ次の申し入れが行われた。

(1)本来なら災害箇所の取り明けを取り明けて原因調査をすべきであるが、第二次災害の恐れあり、災害箇所の取り明け作業はやめたい。

(2)六月十六日一～二番方を、現場の取り明け作業に配役したが、第三次災害の恐れがあるのでやめさせた。

(3)六月十八日、会社・鉱山保安監督局、警察の三者立ち合いのもとで現場を見た。約一時間のうちに小崩落が四回も起き、危険な状態である。

(4)三池新労組、職組より、第二次災害の恐れがあるので、取り明け作業に協力できない、との申し入れがあった。

以上で、「取り明けるのを断念したい」というのである。

福岡鉱山保安監督局としては、第二次災害の恐れのあることは認めざるを得ずとし、また「取り明けるとしても、マイトを使えば物的証拠も証拠能力が失われるたろうと、困惑を示している。

以上に対し三池労組は、「今日のこと、対策さえ施せば、取り明けのできぬはずなし」としながらも、以上の事情から「今次災害の原因が会社にあること」を確認したうえで、会社提案をやむを得ない、と認めることにした。たとえ現場の取り明けが不可能だとしても、すでに災害責任が会社にあることはだれの目にもハッキリしており、一日も早く会社はすすんで相当の責任をとるべきだ。

期手要求増額など

委員会、炭労大会態度きめる

六月二十九日開いた委員会で、三池労組はきたる七月一～三日東京で開催される炭労第九十四回定期大会にのぞむ態度（方針）を確立した。

第一に、当面、中央動員だけで終っている石炭政策闘争をさらに広げるための討論の必要を提起。

第二に、せまる上期々末手当闘争で、要求額を五十二万円とすること。（炭労案四十五万円）

第三に、近ずく秋季闘争で、炭労は退職金として、坑外労働者で勤続三十年で一千万円としているのは、たとえやむを得ないとするも問題があることが強く指摘された。

そのほか週休二日制、年次有給休暇、特殊休日、そのほか救護隊手当、じん肺せき損、振動障害補償、石炭年金、定年延長、健保負担割合変更、労災専門委などの改善も期している。

なお、右の三池労組の方針案は同月二十三日の委員会で提起されていたもの。

短歌

「事態最悪」

退職者　木村守

遂に遂に事態最悪坑口に光景同じく遺体あがりぬ
災害に謝る資本の決まり文句変哲もなく繰り返さるる
技術の粋ありても資本の追求は利潤、災害また繰り返す
億の巨費投じて居りて反古にする奇っ怪なりき資本家の行
江戸明治昭和と続く殿様政治施策は豪商に縋りて居りき
通り魔の川俣言へり「侍に切られる」はなど意味なすがあり

（なお作者の現住所は「荒尾市岱洋区六七三」です）

教科書統制"に反撃を

総評など国民運動推進へ

教科書統制を強める政府、自民党、財界に対抗し幅広い国民運動を展開しようと「教科書攻撃に総反撃する国民集会」が十一日、東京・御茶ノ水の全電通会館で開かれた。同集会は、総評をはじめ、日教組、民主教育をすすめる国民連合、教科書検定訴訟を支援する全国連絡会議など八団体が主催したもので、教師、教科書会社の労働者ら約三百人が参加した。

発言者は教科書法案の制定まで打ち出した政府、自民党を厳しく批判。主催者を代表して稲葉三千男東大教授は「この攻撃は平和憲法の理念にむけられている。これを契機に平和な教科書を創り出そう」と訴えた。また総評を代表して清水教宣局長も「労働者の自らの要求として、地域、職場から幅広い運動をつくり出す」と決意を表明した。

今度の災害を考える

まるで戦場のような現実と聞くが……

手記　元仕繰夫　一退職者

このたびの、三川鉱の落盤による災害で感じる事は、ほかにもあろうが、立体作業（職種の二つとか三つとか重なり合いながら、いっしょに仕事をやること）が一つ反省させられる気がするが、それは年寄りの冷や水でしょうか。

ある一人の、現役の組合員にただした話ですが、「立体作業の事などをとやかくいえたのは昔の事で、今はそんな事は言ってはおれない。立体作業のことを云々していては、仕事にならず、また金にもならん」という事でした。

さらに聞けば、今の掘進現場など、掘進、仕繰、機械、電気などあらゆる係がごちゃまぜになって仕事をやるのが現実だといい、どこにもあるとの事でした。一つの切羽を造るために、まるで戦争のようにごった返しながら仕事をしている現場のサマが目に見えるようで恐ろしくなりました。

今回の災害は、会社職制が、また働く者自身が、このような立体作業をもっと重大問題視していたならば、少くとも電気員の三名の命は救われていたのではなかったか、老婆心ながら悔やまれてならないのです。

他はさておき、この辺でもう一度立体作業を、また、それを云々していては仕事にならず、金にもならないというところまで追いこまれてしまった現実の是非について、考えて見たらどうでしょうか。

×

右の一文は、「たまりかねて書いたから……」として、三池炭鉱の一退職者（坑内夫＝元仕繰夫）から寄せられたものです。三池労組員にとどまらず、坑内で働くすべての労働者自からが、厳重に反省すべき点を提起しているのではないでしょうか。

みいけ

発行所
三池炭鉱労働組合
大牟田市不知火町2
電話(53)3033番
(53)3034番
編集兼発行人　甲斐俊久
半年間1,200円　送料共

職場見直しを

毎年のことですが、七月一日から全国安全週間運動が展開されます。この期にぜひ、職場の現状を見直し、そして本紙を通してどしどし問題点を告発しましょう。